

明治大正期関西弁資料としての 曾我廼家五郎喜劇脚本群

村上 謙

はじめに—明治大正期関西弁資料の整備状況について—

明治大正期関西弁についての研究は、1990年代以降、落語速記本や落語 SP 盤が新たな資料として開拓され、それらを軸に広く行われてきた（金沢裕之（1998）、真田信治、金沢裕之（1991）など）。その後も、都家歌六、岡田則夫などの収集家の尽力によって、落語 SP 盤が CD 化されて市販されたり、初代桂春団治の SP 盤文字化資料が刊行されたりと、貴重な資料が容易に入手できるようになった。また、国立国会図書館による近代デジタルライブラリーなどの整備によって、明治大正期刊行の書籍、音源の WEB 上での閲覧視聴、ダウンロードが可能になりつつある。しかしその一方で、これらの資料が落語関係に偏っているのもまた事実であり、体系的な資料整備という点からは、それらを補うような他のジャンルの資料が欲しいところであった。筆者はかつて、その一環として上司小剣による関西弁小説群を紹介したが（村上謙（2010））、本稿ではその続編として、曾我廼家五郎による喜劇脚本群を紹介したい。

本論に先駆けて述べておくと、今回の脚本群は、従来の資料論の観点からはかなり使いにくい部類に入ると言えるだろう。しかし筆者は、その特性を十分に踏まえれば、むしろ新たな視座が得られると考えている。そこで本稿ではこれらの資料について、基礎的調査を加えた上で、否定表現形式を一例に具体的な活用法を提案する。

2 曾我廼家五郎とその喜劇脚本群について

まず、曾我廼家五郎の経歴を手短に紹介しておく。曾我廼家五郎は明治 10（1877）年大阪府岸和田市生まれ、本名は和田久一、筆名は一堺漁人という。現在ではほぼ忘れ去られた感があるが、明治末から昭和前期にかけて全国的に活躍した喜劇俳優兼脚本家である。

明治 20 年代に歌舞伎俳優として出発した五郎は、明治 36 年、中村時代（後

の曾我廼家十郎)を誘って曾我廼家兄弟劇を旗揚げし、自作を中心とした喜劇を全国各地で上演して人気を博した。大正4年ごろに十郎と袂を分かった後もその人気は続き、昭和23(1948)年に亡くなるまで舞台人として活躍したことが知られる。ちなみに、五郎の死後、劇団は松竹家庭劇と合流し、渋谷天外、藤山寛美らで有名な松竹新喜劇となってゆく¹。

脚本家としての彼は、極めて多作であり、生涯を通じて1000作以上の脚本をものしたとも言われる。それについての証言も多い。

(俳優兼劇作家は)泰西に覓むれば古くは沙翁(中略)の如きあれど、然もこれをわが曾我廼家五郎氏の十余年の間に数百種の戯曲を製作し、将来に於いても一年数十種を創作せんとするに比すれば、もとより物の数にしもあらず、五郎氏は多産豊富の作劇家として、実に古今独歩といふべからむ。(『曾我廼家喜劇集』松葉道人序(大正7))

また、同書の五郎の自序によれば大正7年時点で「七百種以上の脚本が出来」ていたという。彼の多作のほどは、五郎名義の脚本集が明治末から昭和はじめにかけて数種刊行されたことからもうかがえるが、自作のもの以外にも含めて、管見に入った資料の一部を以下、①～⑩として挙げる。

- ①『曾我の家五郎喜劇全集』全20編(曾我の家五郎著、大正11-12(1922-1923)年、大鑑閣刊)
- ②『曾我廼家五郎全集』全12巻(曾我廼家五郎著、昭和5-8(1930-1933)年、アルス刊)
- ③『曾我廼家劇十八番 見たまゝ集』1冊(梨花庵主人著 明治45(1912)年、春江堂書店刊)
- ④『曾我廼家喜劇集』1冊(曾我廼家五郎著、大正7(1918)年、南人社刊)
- ⑤『曾我の家喜劇集』1冊(中村憲(秋圃)著、明治43(1910)年、喜劇会刊)
- ⑥『曾我廼家喜劇円歌新落語集』1冊(三遊亭円歌著、明治44(1911)、三芳屋書店刊)
- ⑦『へその穴』1冊(曾我廼家五郎著、大正8(1919)年、登美屋書店刊)
- ⑧『曾我廼家五郎の滑稽世界見物』1冊(和田久一著、大正14(1925)年、井上盛進堂刊)
- ⑨[国立国会図書館デジタル化資料(歴史的音源)による演劇録音 SP 盤]
- ⑩[国立劇場所蔵曾我廼家五郎自筆原稿類]

①は、五郎初の個人全集で、以下に示すように脚本の形態を忠実に保存してあるもの。現代劇と時代劇を含むが、いずれも明確に発話者が表示され、作品ごとに配役表も備える。語学的利用のしやすさから、まず第一に用いた資料である。ちなみに、①はその大部分が国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されている。

正面に赤毛布^{しやうめん あかげつと か}掛けたる床几^{しやうぎ お}を置き、煙草盆等^{たばこぼんなどちやみせ}茶店の道具一式^{だうぐ しき}よろしく、謎^{あつらへ はやし}の囃^{まくあ}にて幕開く。ト紳士^{しんしむらおぼう}村尾某^{げいしやこたね}、芸妓^{なかに}小種^{きく}、仲居^{にん}お菊^{しやうぎ}の三人^{こし}は床几^{しやうぎ}に腰^{こし}をかけてゐる。

村 尾「どうだ沢山の紅葉^{たたくさん もみぢ}、もう二ヶ月もすれば全部^{ぜんぶ}此青葉^{このあをば}が赤くなるのだな」

お 菊「ほんまだんな、誰^{たれ}が頼^{たの}みもせんのに、ひとり^{あか}で赤^{そま}う染^くつて来るのは不思議^{ふしぎ}だんな」

村 尾「自然^{しぜん}の力^{ちから}は恐^{おそ}ろしいもんだ、変^{かは}つてくれなと云^いつても色^{いろ}が自ら^{おのづか}変^{かは}るのだからな」

小 種「楓^{かへで}が変^{かは}るのが不思議^{ふしぎ}なもんですか、若^{わか}旦那^{だんな}のお心^{こころ}等^{など}はいつも変^{かは}り通^どしですもの」

村 尾「おや妙^{めう}な所^{ところ}へいきさつが下^{くだ}つて来^きたぞ」

(①第3巻所収「片あぶみ」4、5頁。原文は縦書)

①が完結した7年後、同じく脚本の体裁をとった全集②が出版された。これには、①に収録されたものの多くと、先に漏れた旧作、さらにその後7年で書きためたと見られる作品が収められているが、なるべく初出に近いものを、という選択基準からすれば、①に劣ることは否めない。

③～⑧についてはいずれも近代デジタルライブラリーで収集できるものでもあり、紙幅の都合上省略に従うが、⑨および⑩については少し述べておきたい。

⑨は昭和期に発売された五郎自演の演劇録音である。原フォーマットはSP盤であるが、それを国立国会図書館がデジタルアーカイブ化し、「歴史的音源」として館内閲覧限定で公開している(2012年12月時点)²。現在利用できるのは以下の資料である。

- 『江戸土産吾妻草紙(一)(二)』(ニッポノホン(5717,5718)、発売日不明)
- 『背負い投げ(一)～(四)』(ニッポノフォン(17163,17164)、1929年)
- 『木枯らし(上)(下)』(ニッポノフォン(17212)、1929年)

- 『良心（一）～（四）』（コロムビア（戦前）（26526、26527）、1931年）³
- 『老樹の若葉（一）（二）』（ビクター（53278）、1934年）
- 『万歳大学（一）～（四）』（ビクター（53308、53309）、1934年）
- 『河原の名月（一）（二）』（ビクター（53376）、1935年）

いずれの盤も、五郎と2～3名の俳優による朗読劇である。登場人物は、関西弁話者や標準語話者で構成され、中には全く関西弁話者が含まれないものもある（その場合、五郎もほぼ東京式アクセントで朗読する）。また、ここに挙げた作品のうち、①や②に脚本として収録されているものがいくつかあるが、いずれもテキストは大幅に異なる。主にSP盤の収録時間（片面約3分～4分30秒）の都合と見られるが、これは落語SP盤などにもよく見られる改変措置である。

⑩は、国立劇場が収蔵する五郎の自筆原稿、記録類で、大正末から戦後亡くなるまでの台本だけでも270点以上が収集されている。中でも貴重と思われる資料は、大正半ばまでの初演台帳ないし記録を集めた自筆ノート17冊である。それぞれのノートの表紙には五郎の手によって「台帳」と記され、各冊、「第二号」から「第十九号」まで（第一号と第三号は欠）の通しナンバーが振られている（登録No. 13325～13341）。執筆年代は明治40年から大正10年に及び、収蔵資料中最も古いものである。各冊に20本程度の脚本を収めるが、それぞれのテキストについては粗密があって、執筆年、初演地などの記録まで付したものが一方、覚書程度の、いわゆる「口立て」による上演だったのではないかと疑わせるものもある。そして、おそらく①や②の全集はこうした手控えをもとにしつつ、制作されたのではなかったかと想像されるが、詳細は今後の調査に譲らねばならない。

3 調査資料一覧

表1 調査資料一覧

タイトル	所収巻次	発話スタイル	タイトル	所収巻次	発話スタイル
純金の簪	2	△	グード・パッション	6	△×
弥兵衛の榎	2	△	日影の花	6	○
鬼蔦	2	△	?	7	△×
片あぶみ	3	○	水晶の名玉	7	×
色眼鏡	3	△	有情無情	7	△
秘密の黒髪	3	○	愛の結晶	7	○
住吉詣	3	○	辻占	15	○
定期の妻	4	△	女蛇の目	15	○
一つの林檎	4	○	瓜二つ	15	○
面の皮	4	△	停電	15	○
百行の基	5	△	達者な病人	15	△×
絲瓜の花	5	×	球の行衛	15	△×
若き日の影	5	○	瓢箪池	17	○
心の脱線	5	△	昔気質	17	△
警報の音	6	○	十六杉	17	△
八百屋の娘	6	○	大山鳴動鼠一匹	17	△

前述の状況を踏まえ、今回、調査対象としたのは、①『曾我家五郎喜劇全集』所収の現代劇 32 作品である（以下、「五郎作品群」と記す）。表 1 に、タイトルと巻次、関西弁の使用状況（以下、「発話スタイル」）をまとめておく。なお、発話スタイルは、主に筆者の印象に基づき、○△×で分類した。なお、調査資料 32 作品を決定するにあたっては、発話スタイルは一切考慮しなかった。

○：ほぼ関西弁話者のみの作品

△：関西弁に加えて標準語⁴がかなりの頻度で出現する作品

×：関西弁がほとんど用いられない作品。

また、本稿では標準語話者のせりふも分析対象とするために（後述）、×の作品もあえて調査対象に含めてある。

4 利用方法の検討 ー関西弁と標準語の交渉という観点からー

4.1 関西弁の「純粹」さの問題

さて、①『曾我家五郎喜劇全集』に所収された脚本を明治大正期関西弁資料として利用するにあたっては、いくつか考えておかねばならない点がある。まず、関西弁の「純粹」さの問題である。これまでの明治大正期関西

弁研究では、「純粋」な関西弁を収集し、分析、記述するという目標のもと、なるべく「純粋」な関西弁で書かれたテキストを資料として選択してきた。これは明治大正期以外の各時代語研究でも行われる、ごく一般的な資料選択方法であるが、今回もその手法が有効かどうか検討しておきたい。

五郎作品群で登場人物のほぼ全員が関西弁を話す作品（表1で○を付した作品）は、今回の調査資料のうちの約半数を占めるが、残る半数は、次の「純金の箸」のような、関西弁話者と標準語話者とが混在する作品（△を付した作品）である。

小山「ライ／＼おまき、苟も上流の奥様が、おきやあがれとゆふ事が有るか、夫れでは客でも有れば、小山家の夫人としての価値がないぢやないか」

おまき「カチがなければ負けておきますがな」

小山「勝負ぢやない、価値とは値打がないとゆふのだ、実際お前は無教育で困る」

おまき「無教育は承知で初めから内へ入れなはつたのやないか、元々奥様なんてツ言はれる柄ぢや無いよつて、堪忍しておくなはれ、矢張りバアーで働ひて居る方が気楽やと、何んぼ貴方に断りを言ひました」

（「純金の箸」6、7頁）

言うまでもなくおまきが関西弁話者、小山が標準語話者である。このような場合、従来ならば、おまきのことばづかいのみを関西弁資料として利用するのであるが、そのおまきのことばづかいも、詳細に見てゆくと、「純粋」な関西弁ばかりではないようである。実際、以下のせりふを見ただけではおまきが関西弁話者であるかどうか、判断がつかないであろう。

おまき「私が入れたのですが不可ませんか」

（5頁）

おまき「エ、夫れはどうせ、先の奥様のよふな訳には参りませんから」

（5頁）

こうした方言臭の希薄なせりふ部分、すなわち標準語的なせりふ部分が発現する場合、これまで、資料性に疑問があるとか、「純粋」な関西弁ではないとして、調査対象から除外しがちであった。しかし、大正も半ばを過ぎた当時の関西人が標準語の影響を受けていたであろうことは容易に想像されるところであり、おまきの方言臭の希薄なせりふ部分も、当時の関西の言語使用実態を反映していた可能性があるだろう。その場合、研究の方向として関

西弁の「純粹」さを追求することは、当時の関西人の言語使用の実態と乖離する危険性をはらんでしまうのである。こうした危険性を回避するには、研究方針としても、当時の関西弁を、標準語との交渉を前提として捉え直す必要があるだろう⁵。そして、その見地に立てば、関西弁話者と標準語話者が互角に登場する五郎作品群は、研究上の新地平を切り拓くものとして高く評価してよい⁶。

4.2 標準語話者のあり方

次に、五郎作品群における標準語話者に視点を移してみると、五郎作品群の標準語話者の多くは東京（＝非関西）出身であり、その限りにおいて不自然さはあまり感じない。しかし、標準語話者のすべてが東京出身者、というわけでもない。例えば、先に見た標準語話者の小山は神戸近辺の下層階級出身であり、本来なら関西弁話者であるはずである。そこで、小山の人物造型を詳しく見てみると、「成り上りの紳士」（4頁）と設定され、どうやらそれが標準語という形で反映されているようである。次の引用は、関西弁話者であったはずの小山（＝「平公」）が出世して標準語にコードスイッチングしたことに對して、旧友の文吉が批判する場面である。

文 吉「^{へいこうおさま}ワイ平公納るない、^{ぶんきちくん}文吉君なんてツ、^{しゆつせ}出世をしたら^{ことばまでか}言葉迄変
へんならんかえ^や矢ツ^ば張り^{ぶんこう}文公と言ふてくれ、なア、^{へいこう}ワイ平公」
(40頁)

五郎作品群では標準語を、当該人物の身分、すなわち上流階級や知識人階級、資産家、紳士、等の属性を示すために使わせる場合が多々見られる。また、その対比として、使用人や労働者階級には関西弁を使わせる、といった使い分けも見られる。

これと関連して、標準語話者の用いる標準語に、関西弁的要素が混入することもしばしばある。例えば、次の小山のせりふには、標準語的ではないサ変命令形のイ形＋終助詞ヨやハ四ウ音便が見えるし、ジャの混入も見られる。ジャは言うまでもなく西部方言に特徴的な指定表現形式で、標準語としては本来、ダを用いるべきところである。これらについては、小山がかつて関西弁話者であったための混入、という演出上の可能性のほか、作者である五郎が関西弁話者であったための誤用の可能性も考えられるが、いずれにせよ関西における標準語受容のあり方を示すものとして興味深い。

小 山「マア／＼^{がまん}我慢^{きい}せ^いよ、あれも^{とうきやう}気に入らねば^{がくかう}東京の^{りやうく}学校へ留学さ

- して仕舞ふよ、今にお前が思ふ様な家庭にしてやるよ」(9頁)
- 小 山「夫れも気になつて居るのだが、知る通りの暴落で一寸今度は損
 が大きかつたのだ、今に盛り返して、ヨリ以上の大きなダイヤ
 を買ふてやるよ」(9頁)
- 小 山「ヲヤ貴様何時の間に来て居たのぢや」(11頁)
- 小 山「正確な汽車の時間表でも間違ふ時は間違ふのだ、況や刻々と
 変化する人の境遇、間違ふのが当たり前ぢや」(20頁)

4.3 具体的な利用方法の提案に向けて 一発話スタイルの判定方法について一

さて、このように見てくると、五郎作品群を関西弁資料として活用するには、ひとまず発話者の発話スタイル、つまり関西弁話者かどうか、を判定した上で、そのスタイル別に集計、分析する手法が有効かと思われる。ただ、一見容易に思える発話スタイルの判定方法に関しても検討すべき点がある。

まず、関西弁的要素(音変化形、語彙、文法形式等)が発話に頻繁に入っていれば、当然ながらその発話者は関西弁話者と認められる。例えば、～ハンとか、ナハルなどを頻繁に使っていれば、その発話者は関西弁話者であろう。そして、その発話者が何らかの理由で時折標準語的要素を使ったとしても、それは関西弁話者の一時的な標準語使用と見なすべきであろう。また逆に、関西弁要素を用いず、標準語要素を頻用する発話者は標準語話者と認められるだろう。

しかしここで難しいのは、例えば、関西弁的要素としてジャは多用するが⁷、ジャを除けばほとんど方言臭を感じない、といった話者の場合である。そうした方言臭の希薄な発話者として、第3巻所収の「片あぶみ」の七兵衛を挙げておく。最初の例を見れば七兵衛はジャを使っており、関西弁話者のようにも思われるが、当該発話と同一ないし近接する章段における発話を集めてみると、そうとも言いがたいのである。

七兵衛「これ納まりなさんな、今日は最後の手段で来ましたのぢや」(11頁)

七兵衛「さあ小川さん一寸来て下さい」(11頁)

七兵衛「原さん鬼とは何です」(16頁)

七兵衛「御親切にまだ珠数を持って寺参りする程もうろく致しませんので、当年取つて六十五歳、男一代の働き盛りでなあ、へゝゝゝゝ」(16頁)

こうした発話スタイルが実在したのかどうかは今後の課題であるが、このような場合のために、とりあえず、関西弁話者と標準語話者の中間的な段階を設定しておく必要があるだろう。

5 否定表現形式のあり方を通して見た五郎作品群

5.1 否定表現形式一覧

前節までの検討をもとに、具体的な言語現象を分析するとどのようなようになるであろうか。今回は否定表現形式を例にとって分析を試みたい。次に掲げる表2は五郎作品群から動詞文否定にかかわる否定表現形式を全て収集し、さらにそれを発話者の発話スタイル別に分類集計したものである⁸。なお、集計に関して、説明を加えておく。

【発話スタイルの分類方法について】

まず全発話者を、関西弁話者、標準語話者、その両方を用いる話者、およびスタイルのあいまいな話者、の4種に分けた。紙幅の都合上、誰がどのスタイルに属するかについては省略するが、発話スタイルの判定に際しては否定表現形式を含む当該発話者の言表全体から判定した。なお、両方を用いる話者については、かなり明確に併用する者に限って認定した。また、スタイルのあいまいな発話者はごくわずかであったため、今回は便宜的に集計から除外した。したがって、大半の発話者は関西弁話者か標準語話者のいずれかとなった。

【否定表現形式の集計、分類方法について】

次に、発話スタイルごとに、用例を、その形式が関西弁的か否かを問わずに、集計した。例えば、前述の小山は標準語話者として分類し、その使用例全てを標準語話者の用例として集計した。逆に言えば、小山が関西弁的要素を使用しているとしてもそれは標準語話者の用例となるのであるが、この方法は否定表現形式自体を関西弁や標準語に分類せずに済むので実際的である。

最後に、全用例を、表2に示した分類項目に基づいて分類した。その際、①過去＋否定、当為、ンカ、②待遇＋否定、③又系、ナイ系、の順で優先して所属の振り分けを行った（例えば「ございませんでした」は、又系の「ん」や待遇＋否定の例としては集計せずに、過去＋否定の一形式として分類した）。これは、その方がより詳細に分析できると思われるための措置である。また、この分類方法は村上謙（2010）との整合性を踏まえたものでもある。

表2 発話スタイル別に見た五郎作品群の否定表現形式一

	関西弁発話	関西弁標準語両用話者	標準語話者
又系	ぬ(143)、ね(45)、ん(342)、はせん(2)、へん(10)、やせぬ(4)、やせん(4)、やへん(2)、ず(98) 計650例	ぬ(32)、ね(8)、ん(56)、やせん(7)、ず(31) 計134例	ぬ(91)、ね(14)、ん(142)、はせぬ(1)、ず(103) 計351例
ナイ系	ない(21) 計21例	ない(30)、ねえ(5) 計35例	ない(431)、ねえ(28) 計459例
待遇+否定(注1)	おまへん(89)、ござりませぬ(1)、ござりませぬ(38)、ござりませぬ(3)、ござりまへん(1)、ございませぬ(10)、ございまへん(1)、ござらぬ(2)、なさらん(1)、なはらん(4)、なはれへん(1)、なはれん(2)、ませぬ(1)、ませぬ(10)、ませぬ(81)、まへん(134) 計379例	おまへん(3)、ござりませぬ(1)、ござりませぬ(8)、ございませぬ(1)、なさらぬ(1)、ませぬ(1)、ませぬ(37)、まへん(11) 計63例	おまへん(5)、ござりませぬ(5)、ございませぬ(1)、ございませぬ(44)、ませぬ(2)、ませぬ(3)、ませぬ(358)、まへん(2) 計420例
過去+否定(注2)	なんだ(19)、なかった(2) 計21例	なんだ(1)、なかった(2) 計3例	ございませぬでした(1)、なんだ(5)、ませぬでした(9)、なかった(19) 計34例
当為(文中)	な(5)、にゃ(1) 計6例	な(1) 計1例	計0例
当為(文末)	ねばならぬ(7)、ねばなるまい(1)、んとならん(1)、んならん(8)、んなりまへん(3) 計20例	ねばならぬ(1)、ねばなりませぬ(1) 計2例	ねばならぬ(2)、ねばなりませぬ(1)、んけりゃならん(3)、んといかん(2) 計8例
ンカで勧誘、依頼、命令	てんか(12)、なはらんか(9)、まへんか(4)、未然+んか(29)、連用+んか(2) 計56例	未然+んか(11) 計11例	ませんか(1)、未然+んか(16)、連用+んか(1) 計18例
マイ	終止+まい(29) 計29例	終止+まい(1) 計1例	終止+まい(46) 計46例
イデ	いで(34) 計34例	いで(3) 計3例	いで(6) 計6例

(注1) 個別的な敬語動詞と承接した場合は含めない。また「おませ(へ)ん」「ごわせ(へ)ん」などは補助動詞に「ん」のついたものだが、ここに含める。
(注2) 「なんたら」などの条件形を含む。

5.2 各形式の使用状況

【ヌ系およびナイ系】

関西弁的と言われるヌ系からまず見ると、主要形式「ぬ」「ね」「ん」「ず」については、3種全ての発話スタイルで用例が見えている。特に、標準語話者がヌ系をかなり使用している点、注目される(ナイ系459例、ヌ系351例)。一般に、関西弁はヌ系、標準語はナイ系、といった二項対立的な把握が行われがちであるが、五郎作品群においてはその把握は当てはまらないようである。関西弁と標準語の対立軸としては、「ヌ系対ナイ系」ではなく、「ナイを使用するかどうか」であった可能性が高い。

また、ヌ系の内、関西弁話者による「へん」の使用が10例と、ごくわずかである点も注目される。

太兵衛「ヲイ久さん／＼お前逃げて呉れたら、どうもならへんがな」
(「愛の結晶」321頁)

久吉「イ、ヤ死ねへんで」
(「瓢箪池」52頁)

この「へん」は明治中期に登場したと見られる形式であるが、五郎と同世代の上司小剣による関西弁小説群(以下「小剣」)や落語SP盤(以下「SP盤」)にはすでに多数の用例が見えており、使用率に差があるようである。全ヌ系用例に占める割合で言えば、小剣では16.9%、SP盤では13.8%であったが(村上謙(2010))、五郎作品群ではわずか1.5%(10/650)にとどまっている⁹。この結果からすれば、当時、使用者(ないし作者)によって使用率に差が出やすい形式であったことが推測される。いまだへんの草創期、という印象を強く受ける¹⁰。

【待遇+否定】

次に、待遇表現とかかわる否定形式について。ここでは、「ござりません」や「おまへん」といった、動詞文否定以外の場合も含めておいた。関西弁話者では「まへん」「おまへん」などのSH交替形が多く見られる。例えば、「まへん」:「ません」=134例:81例で「まへん」率は62.3%である。小剣では195例:67例で「まへん」率は74.4%と、ともに交替形が過半数を占め

る¹¹。オマスにンがついたオマセンのSH交替形「おまへん」の場合は一層顕著で、本来の非交替形「おません」は一切用いられない。この傾向は小剣でもうかがえた¹²。

番 頭「未だ海^{うみ}の者^{もの}とも山^{やま}の者^{もの}とも判りやしまへんがな」
 (「女蛇の目」51頁)

おきん「大事^{だいじ}おまへんかいな」 (「若き日の影」266頁)

次に、ゴザルを構成要素とする形式を見ると、「ございません」(イ形)が標準語話者に多く用いられる一方で、関西弁話者は「ござりません」(原形)を多く用いるという傾向も読み取れる(表3)。

表3 ゴザルを構成要素とする否定諸形式における原形とイ形の分布
 (括弧内は全用例に占める割合(%))

	原形	イ形	計
関西弁話者	43 (79.6)	11 (20.4)	54 (100)
関西弁標準語両用話者	9 (90.0)	1 (10.0)	10 (100)
標準語話者	5 (10.0)	45 (90.0)	50 (100)

(注) 各用例数は表2の「待遇+否定」で示した用例数を再集計したもの。

小剣では「ございません」4例、「ござりません」7例、「ござりまへん」3例、SP盤では「ございません」0例、「ござりません」4例(内「ござりまへなんど」1例含)、「ござりまへん」2例と、用例はあまり多くないものの、原形が優勢のように見える。

徳 松「へエ身^みなりは穢^{きたな}ふても蜜柑^{みかん}は紀州^{きしゅう}の本場物^{ほんばもの}、中^{なか}は穢^{けが}れて御座^{ござ}り
 ませんわへ」 (「鬼蔦」279頁)

【過去+否定】

過去+否定、いわゆる打消過去については、五郎作品群ではあまり用いられていないが、それでも関西弁話者は主に「なんだ」を、標準語話者は「なかった」を用いる、という傾向は十分見てとれる。

村 井「モシ小光^{こみつ}がこなんだからどうする」
 (関西弁話者の例、「一つの林檎」111頁)

小 山「ヲヤ紙屑屋^{かみくづや}の文吉君^{ぶんきちくん}か、暫^{しば}らくあいはなかつたねえ」
 (標準語話者の例、「純金の箸」39頁)

五郎作品群には「んかった」はまだ見えない。また、「まへんでした」も見えていない。当時、「まへん」も「でした」も存在していたから、「まへんでした」が関西弁話者に用いられていてもおかしくないのであるが、そういうことはなかったようである。

【当為（文中）（文末）】

この項目では当為表現に用いられるいくつかの形式を取り上げた。当為表現には様々な表現形態があるので、形態上取り上げやすいものを集計した。即ち、文末（句末）形式として二重否定を用いる形式のうち「ならん（ぬ）」が後項に来るもの、文中形式としては「ねば」から音変化した「にゃ」、「な」が単独で現れる場合、を主に集計した。SP 盤や小剣では「ねば」をもとにした文末（句末）形式（ex. ねばならぬ）は用いられないのだが、五郎作品群では「ねば」をもとにした形式がいくつか見えている。

八 重「阿^あ呆^ほらしい八^は卦^{つげ}を見るのやないけれど、今^{いま}での売^{うれ}ツ子^この色^{いろ}ちや
んが、モウ約束^{やくそく}の御座敷^{おざしき}へ行^いかねばならぬ^{からだ}体が、乱れ髪^{みだ}で飛び
込^こんで来るのは、お金^{かね}より外^{ほか}におますかいな」

（「日影の花」314 頁）

【その他】

まず、ンカで勧誘、依頼、命令をあらわす場合について。近世後期に出現し、現在の関西弁でもよく用いられる「連用形+んか」（ex. 行きんか、村上謙（2004））と、それに類する「てんか」（ex. 行ってんか）を関西弁話者が用いている。その一方で、両用話者、標準語話者はほとんど用いない。

佐 助「ヲ、与^よ兵衛^{へゑ}はん、まあ一服^{ぶく}しんか」（瓢箪池）64 頁）

橋 本「さうか、ヲイ佐藤^{さとう}の二番息子^{ばんむすこ}今^{いま}の一件一寸^{けんちよつとき}聞^きいてんか」

（「定期の妻」11 頁）

次に、マイについて。当時、本来の終止形ないし連体形接続の形以外に、「(う)+まい」（ex. 行こまい）という形が用いられたことが知られている（村上謙（2010））。しかし、五郎作品群ではそのような例は見えず、全て本来の終止形接続形態のみであった。

6 最後に

本稿では、明治大正期関西弁資料の一つとして、曾我廼家五郎による関西弁喜劇脚本群を紹介した。そしてその具体的な利用の試みとして、否定表現

形式を発話者の発話スタイルごとに分類集計し、関西弁と標準語形との交渉の一端をうかがったが、少なくとも落語資料を補完するものとして役立つであろうことは示し得たと思う。また、こうした検討方法は当然、否定表現形式以外についても活用できるわけであって、そうした分析が今後蓄積されてゆけば、明治大正期関西弁の解明のみならず、当時の関西における標準語受容史のようなものが描けるかもしれない。そうした面においても、五郎作品群は良質なデータを提供してくれるだろう。今後の活用がおおいに期待される資料群であることを再度記して筆を擱く。

引用文献

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』

真田信治、金沢裕之（1991）『二十世紀初頭大阪口語の実態 —落語SPレコードを資料として—』

村上謙（2004）「近世後期上方におけるンの一用法」（国語学 219）

村上謙（2010）「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」（近代語研究第 15 集）

村上謙（2012）「明治期関西弁におけるヘンの成立について—成立要因を中心に再検討する—」（近代語研究第 16 集）

村上謙（2013）「ジャからヤへ—明治大正期関西弁指定表現体系における「標準語化」の影響—」（近代語研究第 17 集）

（付記）本稿は埼玉大学国語教育学会 2012 年度例会（2013 年 2 月 9 日於埼玉大学）での講演「関西弁研究」に基づく。また、科研費補助金（「標準語」の影響下における明治大正期関西弁の実態」（研究代表者：村上謙（若手研究（B）平成 24 - 27 年度）、「近世口語文を対象とした形態素解析辞書の開発」（研究代表者：小木曾智信（基盤研究（C）平成 24 - 26 年度））および国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」による研究成果である。

注

¹ 彼の評伝は各種あるが、大阪府立上方演芸資料館編（2008）『上方演芸大全』

が簡潔でよくまとまっている。

² 国会図書館所蔵の歴史的音源については、その一部がWEB上で公開されている。また、館内限定とされているものも、一部の提携図書館で試験公開が行われている。

³ 本作については、同音源を用いて、コロムビアの廉価盤レーベル「リーガル」から発売されたものもある（67562、67563、1936年）。

⁴ 本稿では「標準語」を、言文一致や標準語政策などの一連の流れの中で形成された、規範意識をとまなう話しことば乃至文体、としておく。

⁵ すなわち、「関西弁」を標準語使用なども含めた「関西人のことばづかい」として広義に規定するということである。

⁶ ちなみに、関西弁の「純粹」度が最も高い資料は落語 SP 盤である。演者も全て関西出身者である上、演目内の登場人物も関西人がほとんどを占めるから、そこで話されることばづかいは全て「純粹な関西弁」と見なされるのである。しかしこれは、仮に当時の関西弁が標準語の影響をこうむっていても、SP 盤でそれを選別、判定することは不可能である、ということでもある。また、上司小剣による関西弁小説群にも標準語話者の登場する作品があるが、当該資料群の整備に携わった筆者の印象では、標準語の使用量は概して多くなく、関西弁との使い分けを精密に分析できるほどではない。

⁷ ちなみに、ジャは、当時の関西でも急速に使われなくなり（村上謙（2013））、厳密に言えばジャは関西弁的要素ではなくなりつつあった。

⁸ 今回は名詞文、形容詞文の否定は扱わない（ex. 「花ではない。」「美しくない。」など）。

⁹ いずれの数値もヤヘンを含まずに集計したもの。

¹⁰ ヘンに関しては村上謙（2012）参照のこと。

¹¹ いずれの数値もゴザルなどとの承接形（ex. ござりまへん）を含まずに集計したもの。

¹² ただし、初代桂春団治の SP 盤などでは「おません」が数多く聞きとれるから、これも個人差が顕著に出るものであったらしい。